

くすりと健康のはなし

第24回

## 薬包紙

一般社団法人岐阜県薬剤師会  
理事 井深宏和

妊娠に気づかず薬を飲んでいました！というお問い合わせを頂くことがあります。妊娠4週目くらいまでは「All or None」（全か無かの法則）といわれる時期で、妊娠が継続していれば何も影響がなかったと言われる時期に該当します。そして4〜15週あたりまでに赤ちゃんの臓器が作られる時期（器官形成期）で薬などの影響を受けやすい時期です。原則として妊娠中（特に器官形成期）は薬の安全性のデータが少ないこともあり薬物療法は避けた方が良いでしょう。ところが薬を飲んでいなくても通常の妊娠で何らかの異常（命にかかわるものから見た目だけのものも含めて）が3〜5%の赤ちゃんにみられます。このリスクは誰しも平等に持っています。さらに妊娠中に赤ちゃんに影響があるとわかっている薬は限られています。過度に薬の影響を心配してお母さんの体調が悪化すると、そのほうが赤ちゃんには影響が大きいことがあります。薬を

## 妊婦とくすりについて

飲みながら妊娠を継続する方もいらっしゃると思います。だからといって安易に薬を飲むのではなく、症状のある時は妊娠の可能性も含めてきちんと診断して頂き、必要であれば薬も決められた用法・用量を守り、しっかりと飲みましょう。

おなかもだいぶ大きくなってくると腰痛に悩まされる方も多いのではないのでしょうか。これは出産にそなえ骨盤の関節が緩むためです。その緩んだ関節を支えるために筋肉・腱・関節への負担が大きくなるため腰痛を起こしやすくなります。そうなる痛み止めを飲むもうーや、湿布を貼ろうーとなりがちですが、ここで注意して頂きたいことがあります。痛み止めの成分には妊娠の後半に摂取すると、赤ちゃんがお腹の中にいるうえで必要な動脈管という大事な血管を閉じさせてしまう作用があります。痛み止めと言ってもその作用の強弱は色々ですので、医師・薬剤師に是非ご相談してください。